

J・G・フレーザーのimmortality概念について

——『金枝篇』における靈魂解釈から——

相澤 里沙

はじめに

本稿は、J・G・フレーザー『金枝篇』における、immortalityの概念を明らかにしようとするものである。

フレーザーの『金枝篇』は、アリキアの森の司祭職継承に関する規則の謎を解こうとした書である。アリキアの森の司祭は、その継承の際に金枝を折り取り、前任者を殺さなくてはならなかった。前任者を殺さなくてはならない規則の解明に大きく関わる、神あるいは神と見なされる人物を殺すという慣習は、PartIIIとPartIVにおいて論じられている。神あるいは神と見なされる人間の死と復活は、その復活の形態において多様であるが、共通した性質を持っていることができる。それは、彼らが靈魂及び、その靈魂の性質としてimmortalityを備えているということである。

フレーザーは靈魂に対してimmortalという単語をよく用いる。その際、肉体に対してはmortalを用いる。しかし、このimmortalという単語は、常に靈魂にのみ使われているわけではない。靈魂がimmortalであるときにはmortalを用いた肉体に対しても、immortalが用いられている部分が存在する。

この書は様々な民族の慣習を集め、フレーザーが解釈した書である。そのため扱われている事例は多様で、フレーザーがあるひとつの解釈をなしている場合も、事例は全体としてばらつきがあり、統一性がないのは当然であるかもしれない。しかし、それらの解釈はフレーザーの視点からなされているので、どのような視点からそれらを解釈しているのかを検討することは可能であると考ええる。フレーザーが解釈において用いているimmortalityの概念について検討し、明らかにしていきたいと思う。

さて、前述のように、『金枝篇』においてはimmortalが靈魂と肉体、それぞれに対して用いられている部分があり、少なくとも2つのimmortality概念が存在するといえる。一つめは、靈魂にかかわるimmortality、そして二つめは、肉体にかかわるimmortalityである。一つめに関しては、例えば次のような記述がある。

人間神[神と見なされる人間]を殺す動機は、その身体が衰弱し、そのdivine spiritが同様な衰えて苦しむのではないかという恐れである。その衰えは自然の動きと彼の崇拜者らをも危険にさらす。彼らは宇宙の力は人間神の力と結びついていると信じている。

神的な人物、特に神的王[神と見なされる人間]を殺すという慣習は、immortal spiritをそのmortal envelopeから解放し、自然における腐敗の力を止めるための、残酷だが共感的な試みであった。[Frazer, 1911 c : v]

この記述においては、靈魂がimmortalであり、肉体はmortalであるとされている。immortalityは靈魂に関わっている。二つめのimmortalityに関しては、次のような記述が見られる。

知的発展の初期の段階において、人間は自分自身を本質的にimmortalであると考え、妖術師の邪悪な技がなければ、永遠に生きると想像する。
[Frazer, 1911 c : 1]

この場合のimmortalは、永遠に生きることから、肉体の性質としてのimmortalである。

これらの記述から、金枝篇においては2つのimmortalityについての概念が存在していることがわかる。一つは靈魂のimmortality、もう一つは肉体のimmortalityである。これら2つのimmortalityの概念は、肉体と靈魂の二分に基いて考えられている。靈魂についての概念は『金枝篇』において大きな意味

をもち、フレーザーの様々な理論の基盤になっている。したがって、まずフレーザーは靈魂をどのようなものとして解釈しているのかを考えていこうと思う。

1 フレーザーの靈魂解釈

『金枝篇』には、フレーザーの靈魂についての全般的な解釈が述べられている部分がある。

フレーザーは未開人は靈魂をつぎのようなものとして考えていると述べている。

靈魂とは生物の中にいて、その生物を動かしている小さな生物である。動物の中にいる動物、人間の中にいる人間が、靈魂である。そして動物や人間の行動が、靈魂の存在によって説明されるように、睡眠や死という休止状態は、その不在によって説明される。睡眠や失神は、一時的な靈魂の不在であるが、死は永遠の靈魂の不在である。それゆえ、もし死が靈魂の不在であったなら、それから守る方法は、靈魂が身体を離れるのを防ぐか、もしそれが離れたらそれが確実に戻ってくるようにすることである。

[Frazer, 1911 b : 26]

ここで、一般的に未開人は、靈魂を肉体から区別されたものとして考えていると、フレーザーが解釈していることがわかる。靈魂は、その人の生死に関わる生命原理と考えられる。そして、この一般的な靈魂観念を基盤に、未開人は様々な性質を靈魂に認めていると解釈しているのである。フレーザーが靈魂として解釈しているものの性質を見てみると、次のような分類が可能である。

A 持ち主の個別的人格に関わる靈魂

- ① 自己意識としての靈魂
- ② 自己意識の媒体としての靈魂
- ③ 属性の媒体としての靈魂
 - a) 超自然的属性（特殊な力、神的な力）の媒体としての靈魂

b) 現世的属性（地位、身分、肩書き、資格、名前、身体的特徴など）の
媒体としての靈魂

B 持ち主の個別的な人格に関わりのない靈魂

④ 生命原理としての靈魂

AとBの違いは、前者が持ち主の個別的な人格を示すものに関わるのに対し、後者は持ち主の個別的な人格には関わらず、生死にのみ関わる靈魂である。ここで、個別的な人格にかかわる靈魂とは、その人を個別化・特殊化する性質をもつ靈魂とする。したがって、そこには自己意識と属性が含まれる。属性は、その人が特別に持つ超自然的属性と現世的属性のふたつに分けられる。それらをそれぞれ事例から見ていくことにする。

まず、Aの個別的な人格に関わる靈魂についてであるが、①自己意識としての靈魂、②自己意識の媒体としての靈魂、そして③属性の媒体としての靈魂に分けられる。①自己意識としての靈魂の例として、次のような例が考えられる。

パタニ・マレー人は、もし人が眠っている間に顔に色を塗られたら、その人から出て行った靈魂が彼を見分けることができず、彼は顔が洗われるまで眠り続けるだろうと想像する。[Frazer, 1911 b : 41]

この事例においては、靈魂は眠っている人の意識そのものである。意識そのものである靈魂が身体から抜け出すことによって、その人は眠り、靈魂が戻ってくることによって意識を取り戻し、覚醒するのである。ゆえに、ここでは靈魂は自己意識そのものであると考えられているといえることができる。

また、次のような事例も挙げられている。

インドの物語。王が自分の靈魂を死んだバラモンの身体に移し、他の人が自分の靈魂を死んだ王の身体に移す。すると、他の人が王に、王はバラモンになる。[Frazer, 1911 b : 49]

この事例は、靈魂が身体から抜け出すことについて、挙げられている事例である。この事例においては、身体から靈魂が抜け出すことは生死に関わるだけではない。靈魂の入れ替えが自己意識の入れ替えを伴っている。したがって、ここでは、靈魂は持ち主の②自己意識の媒体としての役割を果たしている。

つぎに、③属性の媒体としての靈魂についてである。属性というのは、持ち主の自己意識とは別であるが、その人の有する特徴や性質に関わるものである。属性についても、大きく二つに分けられる。一つは神的な力などのa) 超自然的属性の媒体としての靈魂、もう一つは、地位、身分、肩書き、資格、名前、身体的特徴などのb) 現世的属性としての靈魂である。

まず、a) 超自然的属性と考えられるものの例を見てみる。

シルック族の王は、一つの神的靈魂 (divine spirit) によって生かされている。王の生命は、国の繁栄と密接に関わっている。王は衰え始めたとき、あるいはまだ強健であるうちに殺される。それは神的靈魂が衰えの影響を受ける前に、後継者に移すためである。[Frazer, 1911 c : 17 ~ 27]

この事例においては、靈魂を伝達することがその力の伝達になっている。王の生命は国の繁栄と密接に関わり、王の衰えは世界に危険をもたらすのである。したがって、靈魂を後継者に伝達する。このとき、国の繁栄に関わる神的な力が後継者に伝達されることになる。ゆえに、靈魂には超自然的な力の媒体という性質が与えられていると考えられる。

次に、b) の現世的属性と考えられるものの例である。

アルゴンキンの女性たちは、死んだ人の横に集まる。死者の靈魂を受け取り、それによって妊娠することを願うのである。フロリダのセミノーレ族の間では、女性が分娩期に亡くなる、子供は彼女の靈魂 (spirit) を受け取るので、彼女の顔を持つようになる。[Frazer, 1911 c : 199]

この事例においては、生まれる子供が死んだ人の靈魂を受け取っている。アルゴンキンの例においては、死者の靈魂を受け取った後のことは記述されていないが、フロリダの例においては、子供が彼女の顔を持つようになるということで、靈魂は身体的特徴の媒体となっている。

アメリカ・インディアンにおいては、司祭が捕らえられた靈魂を死者の後継者に伝達する。靈魂を伝達された人は、死者の名前と地位を受ける。
[Frazer, 1911 c : 199]

この事例においては、靈魂を伝達することが、死者の名前と地位を伝達することである。したがって、靈魂はb) 現世的属性の媒体としての役割を果たすものとして考えられている。

ニアスにおいては、父の後を継ぐ者が、父の最期の息とともに靈魂を取ることが、継承権を確立することである。[Frazer, 1911 c : 198]

この事例においては、靈魂が継承権となっている。靈魂を獲得することが父の地位を継ぐことにつながる。したがって、ここでも靈魂はb) 現世的属性の媒体としての役割を果たしていると考えられる。

これらのことから、フレーザーは靈魂を単なる生命原理としては考えていないことがわかる。①自己意識、②自己意識の媒体、③属性の媒体のように、持ち主の個別的人格に関わる性質の媒体なるものを靈魂として解釈しているのである。もちろん、靈魂と肉体は区別されているというのが前提である。

次にBに関してである。靈魂が非人格的性質をもつとは、靈魂が持ち主の個別的人格とは無関係であり、単なる生命原理としか解釈されていない場合のことである。フレーザーが取り上げている事例をもとにそれらを検討していく。

メガラのニソス王は、頭の中央の毛を抜かれると死ぬという運命であった。

[Frazer, 1913 : 103]

この事例においては、髪の毛＝靈魂（の場）とされる。この場合の靈魂は、持ち主の自己意識や、属性には関わりがない。持ち主の生死にのみ関わる生命原理である。

セイロンの王は、戦に行っている間、呪術によって彼の靈魂を身体から取り出し、家にある箱の中に置いておくことができた。そうして彼は戦において不死身であった。[Frazer, 1913 : 102]

この事例においては、靈魂は自己意識にも、その王の属性にも関わりがない。戦において生命の安全を確保するためだけに箱の中で保管されている。ゆえにここでの靈魂は単なる生命原理としての靈魂である。

これらのことから、④は持ち主の個別的人格とは関わりを持たない靈魂であることがわかる。もちろんそれらを他のものへ伝達することもない。単なる生命原理としてしか解釈されていないことがわかる。

これらのことから、フレーザーは、大きくわけると二通りに靈魂を解釈しているといえる。一つは靈魂は個別的人格に関わる性質をもっているという解釈である。さらにそれを細かく分けると、靈魂を自己意識の媒体として、超自然的属性の媒体として、現世的属性の媒体として解釈しているということがわかる。そしてもう一つの靈魂解釈は、単なる生命原理としての靈魂である。これは個別的人格には関わらず、したがって伝達もされない。単に持ち主の生死にのみ関わるものが靈魂として解釈される。これら2つに共通することは、靈魂は肉体と区別され、持ち主の生死に関わっているということである。

2 immortalityの諸相と靈魂

さて、ここまで、フレーザーのimmortality概念と深く関わっている、靈魂についての解釈を見てきた。次にそれらがimmortalityの概念とどのように関

わっているのかを見ていくことにする。

前述のように、フレーザーはimmortalという単語を2つの文脈において用いている。1つめは、靈魂にかかわるimmortality、2つめが肉体に関わるimmortalityである。それぞれはどのように靈魂、あるいは肉体に関わっているのだろうか。

(1) 靈魂に関わるimmortality

このimmortalityは、肉体はmortalであるのに対して靈魂はimmortalであるという文脈におけるものである。これはPartⅢのDying Godの序文において述べられ、PartⅢを貫いている観念であり、PartⅣにおける神の死と復活にも関係している。肉体はmortalであるのに対して靈魂はimmortalであるというこの観念は、すべて一様な事例を通して論じられているわけではない。その観念が表れている事例を、靈魂と死後の肉体の関係から見てみると、次のように4つの類型に分けることができる。

- 1) 靈魂継承型
- 2) 復活型
- 3) 靈魂継承型と復活型の混合型
- 4) 神格化型

1) は靈魂が後継者に継承される、つまり死後靈魂が異なる肉体に伝達される類型で、2) は同一人物が復活する、つまり靈魂が存在する肉体が同一である類型、3つめは同一人物が復活するが、靈魂が入る身体に変化が生じる類型、そして4つめは、死後肉体は存在しなくなっても、靈魂が存在し続け、死者が神として崇拝されるようになる類型である。それらを順に検討していくことにする。

1) 靈魂継承型

まず、靈魂継承型について検討する。靈魂継承型として考えられるのは、次のような記述である。

未開の民族は自分達の安全と世界の安全さえも、人間神 (god-men) あるいは神の人間化身 (human incarnation of the divinity) の生命と密接な関係があると信じていた。それゆえ、人間神の生命に最大の注意を払うのであるが、老いと衰え、死を防ぐことはできない。しかし、自然の運行は彼の生命に依拠しているので、衰えと死によってその力が消滅することは、自然の運行に破壊的な影響をもたらす。これらの危機をそらす唯一の方法が、人間神 (man-god) を殺すことである。人間神の力が衰え始める徴候を見せるやいなや、彼を殺すのである。その理由は、身体の衰えによって靈魂 (soul) が損なわれてしまう前に、活力のある後継者に移すということである。[Frazer, 1911 c : 9]

自然死や病気で死ぬ時、身体はすでに最終段階にあり、靈魂 (soul) もその影響を受けてしまうので、その前に殺すということが望ましいとされる。つまり、人間神 (man-god) を殺すことによって、次のようなことが可能になる。まず、靈魂を適した後継者に移すことが確実にできるようになる。次に、人間神の本来の力が衰える前に殺すので、世界に悪影響を与えずに済むようになる。そのように、人間神を殺し、絶頂にある間に靈魂を活力のある後継者に移すことによって、あらゆる目的が満たされ、全ての危機がそらされるのである。[Frazer, 1911c : 10]

上記においては、神的な人物が殺されることについて、肉体の死後も靈魂は存在しつづけ、後継者の新しい身体において作用するという信念があるとの解釈がなされている。フレーザーは、神的人物 (divine persons) を殺す慣習についての説明は、殺される神の靈魂はその後継者に移されるという考えを想定するか、その考えと結び付けられる [Frazer, 1911c : 198] と述べている。また、死んだ人間の靈魂は、彼の後継者に移されるという考えは、完全に未開人によく知られている [Frazer, 1911 c : 198] とも述べている。この殺される神 (と見なされる人間) の靈魂が後継者に移されるという理論を証明するために、おびただしい例が挙げられている。しかし、フレーザーが靈魂である

と解釈しているものの性質に着目してみると、挙げられている例は一様ではない。

靈魂が後継者に移されるという神殺しの理論が最も顕著に表れる例としてフレイザーが挙げているのが、シルック族の例である。フレイザーによると、シルック族の王は皆ひとつの靈魂によって生かされていると信じられている。王が病気や老齢などで弱ると、周りにも影響が出るので、健康なうちに殺される。その目的は王の靈魂を後継者に移すためである [Frazer, 1911 c : 17 ~ 27]。

この例では、靈魂は王の神的な力の媒体であるとされている。靈魂の継承に関して挙げられているその他の例では、靈魂が力、地位、身分、肩書き、資格、名前や身体的特徴など、様々なものの媒体として現れている。しかし、靈魂を媒体として伝達されるものは、持ち主を個別化・特殊化するものであるという点、つまり持ち主の個別的人格に関わるという点で共通している。それらが死の際に肉体から出て行く靈魂であると解釈されている。

また、樹木靈が殺されることも靈魂継承に関わる。その例として、フレイザーは聖靈降臨祭における真似事の殺人を挙げており、そこで殺される人物を樹木靈の代表であるとしている [Frazer, 1911 c : 211]。そして、それらを殺す理由は、前述の神的王 (divine king) を殺す理由と同じである [Frazer, 1911 c : 211] という。フレイザーは次のように述べている。

樹木靈を、その衰えを防ぎ精力旺盛な後継者においてその再生を確実にするために殺す [Frazer, 1911 c : 212]

[春に樹木靈の代表を殺すことは、植物の生長を促進し早めるための手段であるのは] 樹木靈を殺すことが、より若く精力旺盛な形で彼の再生と復活と結び付けられているからである。[Frazer, 1911 c : 212]

つまりフレイザーは、聖靈降臨祭において樹木靈の代表が殺されるのは、靈

魂を元気なままで後継者に移すためであると解釈しているといえる。フレイザーは、殺されること、すなわち身体の死は、靈魂が新しい身体で開始するためには必要なことであると考えているのである。肉体が消滅しても、靈魂は存在し続けるということである。

また季節による樹木靈の入れ替えも、靈魂の継承とよく似た解釈をされる。フレイザーによると、それは「死の運び出し」と言われるもので、「死」の運び出しの後、一般的に「夏」「春」もしくは「生命」の取り入れの儀式が行われる [Frazer, 1911 c : 233] という。フレイザーは次のように述べている。

「死」は捨てられる人形によって表わされ、「夏」や「生命」は連れ戻される枝や樹木によって表わされる。……「死」の人形が壊された後家に運ばれた樹木は、「死」（を表す人形）が捨てられるか壊されたあとで「夏」や「生命」の代表として持って帰られた樹木や枝と、明らかに同じものである。 [Frazer, 1911 c : 247-9]

我々は「夏の木」が「死」の人形の再生であるという事例を見てきた。それゆえ、これらの事例において、「死」と呼ばれる人形は、樹木靈か植物靈の化身に違いないということになる。「死」の追放と「夏」の運び入れを、……春における樹木靈の死と再生の単なるもう一つの形態とみなすに至る。 [Frazer, 1911 c : 252]

この例においては、「死」の運び出し（樹木靈を殺すこと）によって、「夏」が運び入れられる（樹木靈の再生）。樹木靈の力が衰える前にその容器であるところの「死」や「謝肉祭」の人形を運び出し、新しい力のある容器であるところの、「夏」の代表としての樹木を運び入れるというわけである。これは、前述の人間神を殺し、その後継者に靈魂を継承させることと同様の解釈であろう。樹木靈は、植物の生長に影響を与える。その能力が靈魂という媒体によって、新しい樹木靈に与えられるのである。

さらに、神の死と復活の儀式の事例についても、このような解釈が見られ

る。アドニス、アッティス、そしてオシリスのうち、アドニスとアッティスは初期の時代には、生きている人間によって表され、実際に殺されていたという。

[Frazer, 1906 a : 151、246、285]

そして、アッティスの司祭は、松の木やスミレにおいて神的生命を現す植物の神であり、ヨーロッパの祭りにおいて殺される役者や、ネミの湖畔において殺されていた司祭と一致する[Frazer, 1906 a : 287]とフレイザーは述べている。アドニスとアッティスは、人間によって表され、その人間は神として殺されていた。その目的は、前述の農民の樹木霊における靈魂の継承と同じである。神の靈魂を元気なままで保ち、後継者において再生させるためである。神の代表としての人間を殺しても、その靈魂は後継者に伝えられる。そしてその靈魂には世界と崇拝者に影響を与える性質があり、単なる生命原理ではない。神的な能力を伝達する媒体として解釈されているのである。これらの例においては、靈魂は生命原理としてよりも、持ち主の能力の媒体としての役割のほうが重視されて解釈されているようである。

2) 復活型

次に、復活に関わるimmortalityである。本論における「復活」(引用以外)は、死ぬ前と同一の肉体で、その肉体が靈魂との区別なく生き返ることを指している。このような復活に関しても、肉体は滅びても靈魂は不滅であるという解釈が見られる。フレイザーは次のように述べている。

[春に樹木霊の代表を殺すことは、植物の生長を促進し早めるための手段であるのは、]樹木霊を殺すことが、より若く精力旺盛な形で彼の再生と復活と結び付けられているからである。……それで、ザクセンとテューリンゲンの慣習において、「野人 (Wild Man)」が撃たれた後、彼は医者によって再び生き返らせられる。……これは正確に、伝説がネミにおける最初の森の王、ヒッポリュトスもしくはウィルピウスに降りかかったと断言したことである。彼は自分の馬によって殺された後、外科医アイスク

ラピウスによって、生き返らせられた。[Frazer, 1911 c : 212 ~ 214]
スワビアのいくつかの地域においては、懺悔の火曜日に鉄ひげ博士が病氣
の人から血を取るふりをするが、その人はそこで死者のように地に倒れ
る。しかし最後にはその医者が、彼に管で空気を吹き入れることによっ
て彼を回復させる。医者によって生き返らせられるのである。[Frazer,
1911 c : 233]

この二つの例では、樹木霊の代表が復活させられている。ここで、ヒッポリュ
トスがアイスクラピウスによって生き返らせられたという例についてフレー
ザーは、そのような伝説は、森の王を殺すことは彼の後継者における再生と復
活への、単なる一段階に過ぎないという説とよく一致する [Frazer, 1911 c :
214] と述べている。霊魂継承型においては、死は霊魂を後継者に移すための
必要段階であると論じられているのを見てきた。この復活においても、死は霊
魂が新しく活力を得るために必要なものであるとされている。

さらに、ロシアの神話的な人物の死と復活の儀式もこの型に含まれる。フレー
ザーは次のように述べている。

これらのロシアの慣習は明らかに、オーストリアとドイツにおいて「死の
運び出し」として知られている慣習と同じ性質を持っている。それゆえ、
もしここで後者に採用された解釈が正しければ、ロシアのコストルボン
コ、ヤリロと他もまた本来植物霊の化身であったに違いない。そして彼ら
の死はその再生の必要な予備段階とみなされていたに違いない。[Frazer,
1911 c : 263]

ロシアの例は、「死の運び出し」と同じ性質であると述べている。その点から、
この復活型も、霊魂継承型と同様な解釈がなされているといえる。肉体が一度
死んだとしても、霊魂が消滅するということはない。それどころかよりおおき
な活力を得ると解釈しているのである。霊魂継承型においては肉体がmortal

であるので、後継者に靈魂を繼承させなくてはならない。復活型においても肉体はmortalであるのは同様であるが、一度死んで復活することによって、靈魂の衰えを防がなくてはならない。復活型においても植物靈の化身であると述べていることから、靈魂は単なる生命原理ではない。植物靈は、植物の生長に影響を与える力を持つ。その力の媒体として靈魂は考えられている。

3) 靈魂繼承型と復活型の混合型

ここまで、2つのimmortalityを検討してきた。靈魂繼承型においては、前任者が身体的に衰えるまえに、後継者に靈魂が繼承される。前任者の肉体が消滅したとしても、靈魂は後継者において存続し続ける。そしてその力を生者に及ぼし続けるのである。復活型においては、肉体的には一度死んでも、復活することで、靈魂はよりおおきな活力を得るとされる。やはり肉体は死んでも靈魂はそのまま存在し続ける。靈魂が力を持ち続けるために、肉体の死が必要とされる。これら2つの類型においては、靈魂は属性の媒体として解釈されていた。

フレーザーは生命に関わる現象を靈魂によって説明しているのであるが、これまでの事例においては、生命に対する肉体の関わりが明白に述べられているものはなかった。しかし肉体が生命に関わりをもつことは明らかであろう。なぜなら、靈魂の繼承においては、肉体の衰えが靈魂に影響するのであり、復活においては靈魂が新しくなるためには肉体が新しくならなくてはならないからである。しかし、この点（肉体）に関してはフレーザーの言及はない。

肉体の必要性が明らかになる例が存在するので、それについてフレーザーがどのような解釈をしているのかを検討したいと思う。その例はオシリスの儀式であるが、そこでエジプト人の死や復活、再生に関する記述を見て、どのような解釈がなされているかを考える。

フレーザーがエジプト人について記述しているところによると、古代エジプト人は、身体の完全性による人間のimmortalityを固く信じていた [Frazer, 1906b : 103] という。そして、次のように述べている。

エジプトの神々が死んだのは、彼らも人間と同じように肉体と靈魂からなっており、あらゆる肉の受難と虚弱に左右されていたからである。そして、彼らの靈魂さえ、人間と同様に、死後身体がばらばらにならない限り持ちこたえることができるだけだった。ゆえに、身体とともに靈魂が究極的な死を迎えないように、死体を保存しておく事が必要であった。ミイラにする技術によって、体が無期限に腐敗から護られ、死者の靈魂の寿命を延ばすことができるようになった。[Frazer, 1911 c : 4]

また、フレーザーはミイラにする技術の発明のことを、immortalityの望みを与えた発明 [Frazer, 1906 b : 4] と述べている。ミイラにすることによって、靈魂のimmortalityをはかったということであり、肉体の完全性によって靈魂もimmortalになるとされる。しかし、このミイラに関しては単なるもとの肉体の保存ではない。フレーザーは、古代エジプト人は、死者は、彼の靈魂が発見され、彼のミイラにされた体に入って初めて、あの世での生活を開始する状態になると思っていた [Frazer, 1906 b : 68] と述べ、ミイラにされ復活する死者について記述している。

ナイルの谷の墓は、復活の秘儀がどの死んだエジプト人のためにも行われたということを示す。オシリスが死に、生き返ったように、全ての人々は彼のように永遠の生命に復活することを望んだ。エジプトの聖句においては、死者は「彼もまたオシリスが生きるように必ず生きる。オシリスが死ななかったように、彼もまた死なない。オシリスが絶滅しないように、彼もまた絶滅しない。」と言われている。死者はオシリスのように切断された身体で横たわっていると考えられていて、オシリスの母である天の女神ヌトが彼の無残なばら撒かれた足を集め、彼女自身の手でもってそれを不死で神的な形に作りにくると語られることによって慰められた。「彼女は汝に頭を与え、汝に骨を持ってきて、汝に足をつけ、身体に心臓を入れる。」そのように、単に靈魂的にだけでなく身体的にも、オシリスの復活のよう

に、死者の復活は考えられた。「彼らには心臓があり、感覚があり、口があり、足があり、腕があり、四肢全てがある。」しかし後世には、死者が生き返る身体は、物質的な身体 (material body) ではなく、霊的な身体 (spiritual body) であると信じられた。[Frazer, 1906 b : 16]

ミイラにされた肉体は同一人物のものであるが、それに入ることによって「あの世」での生活を開始する。あの世での身体は、現世における肉体と同一のものであるかどうかはフレーザーの引用からは判断できない。しかし、物質的な身体とは異なる霊的な身体であると信じられたという記述がある。したがって、フレーザーは、同じ肉体における復活であるが、肉体は質的な変化をしていると解釈しているとも考えられる。すなわち、ある身体から異なる身体へ靈魂の継承が行なわれているとも解釈できるのである。

ここでは肉体の必要性が大きく述べられているが、それでもフレーザーが霊的な身体ということに言及する点において、物質的な身体はmortalであることを強調しているように感じられる。

ここまでの事例では、靈魂の継承や復活に関わっていた靈魂は、神的な力などの超自然的属性や地位、身分、肩書き、資格、名前や身体的特徴などの現世的属性の媒体として考えられていた。それに対し、「ミイラを生き返らせ、ミイラにあの世での新しい個々の生命 (individual life) を開始する方法を与えた」[Frazer, 1906 b : 15] という記述から考えると、ミイラに入る靈魂は自己意識の媒体として解釈されている。したがって肉体が死んでも靈魂は存続し続ける。そしてミイラに入って新しく生命が開始される。つまり死後ミイラになっても自己意識は存続し続けているということになる。このとき、靈魂は自己意識の媒体として解釈されているといえよう。ミイラにすることがimmortalityの望みを与えたということは、言い換えれば、身体の完全性が靈魂の存続に対する望みを与えるということになる。ゆえに、ここでは生命に肉体が関わっているが、immortalityは靈魂、より正確に言えば自己意識の存続であるとされるのである。

4) 神格化型

ここまで、靈魂継承型、復活型、靈魂継承型と復活型の混合型のimmortalityを見て、それぞれを検討してきた。これらは肉体はmortalであるということとを前提に、形態は異なるが肉体を新しくすることによって、靈魂を存続させていた。そして肉体の状態も異なるけれども、靈魂は肉体において存在していた。次に神格化に関わるimmortalityを見てみる。神格化について、フレーザーは次のように述べている。

ニヤカングは、尊敬された実際の人間であった。ニヤカングはシルック族の国中で崇拝されている。[このようなニヤカングの例は]死んだ王の崇拝は、国民の支配的な宗教に発展するというを示すようである。それゆえ、古代エジプトにおいてオシリスの宗教はその方法で生じたという見解もありうる。明らかに、いくつかの興味深い類似が、死んだニヤカングと死んだオシリスとの間に見出される。……エジプト人の王が、自分をオシリスと同一視したように、シルック族の王は依然として、彼らの神に祭られた前任者であるニヤカングの精霊によって生命を与えられており、彼の神性を共有していると信じられている。[Frazer, 1906 b : 167]

シルック族とその王家の創始者ニヤカングの例は、靈魂の継承を論じるための例として挙げられていた。そしてオシリスとの関連においては、死んだ王が神として祭られるようになったという例として挙げられている。ニヤカングはシルック族の最初の王であり、その人間性に対するシルック族の信念が、ニヤカングとその後継者である王たちの崇拝の間の類似によって裏付けられる[Frazer, 1906 b : 166]と述べている。このことから、この事例においても靈魂は単なる生命原理としてのみ存在しているわけでないことがわかる。さらに、ニヤカングはその人間性によって崇拝されるということであるので、現世的な属性が死後も存続し続けるということが出来る。靈魂継承型においては、超自然的属性としての神的な力が靈魂という媒体によって、後継者の肉体に伝達さ

れていた。神格化においては、死後も現世的な属性が存続するとされ、その媒体としての靈魂は肉体がなくとも存続すると解釈されている。この事例の場合、崇拜者の記憶に残るというかたちで死後も個別の人格が存続する。そして、それによって崇拜され、神とされるようになったということである。ゆえにその人についての記憶が、その人の属性として靈魂によって媒体され、死後も存続し生者に影響を及ぼすことが、immortalityであると解釈されている。

ここまで、4種類のimmortalityについて検討してきた。これらのimmortalityは、靈魂と肉体を区別し、靈魂をimmortalであるとしていることは共通しているが、肉体と靈魂の関係は少しずつ異なる。靈魂は、単なる生命原理ではなく、持ち主の自己意識の媒体、あるいは持ち主の力、資質、地位、名前、身体的特徴などの属性の媒体であると考えられている。すなわち、ここでのimmortalityに関わるのは、1における「A 持ち主の個別の人格に関わる靈魂」である。たんなる生命原理ではない靈魂が、肉体の死後も存続し何らかの影響を生者に及ぼし続けることがimmortalityであるとされている。

(2) 肉体にかかわるimmortality

次に肉体に関わるimmortalityについて検討していきたいと思う。靈魂に関わるimmortalityは、肉体はmortalであるのに対し靈魂はimmortalであるとされる。(靈魂は肉体の衰えの影響を受けるとされ、肉体が衰えない限り靈魂も衰えないということになる。しかし、肉体はmortalであるので、靈魂をimmortalにする試みがなされたりする) それに対し、肉体のimmortalityは、靈魂が安全である限り肉体はimmortalであるとされる。(靈魂は消滅の可能性もある。同様に肉体はimmortalの可能性もある)

肉体のimmortalについて述べられているのは、特に外魂 (External Soul) ¹の章である。フレーザーが外魂について述べていることを要約すると次のようである。

1 安全のために、体の外の安全な場所に置かれる[Frazer, 1913: 169]ように、人間の身体の外部に存在する靈魂のこと。

未開人は、それ（生命）を、具体的で物質的なものと考え、そのように考えられる靈魂は、人間の中に存在する必要はない。人間の中に存在するよりも、外の秘密の場所に隠しておいたほうが安全であると考え、そのような場所におく。そうすることによって、靈魂が無傷である限り、その人も不死であるとされる。[Frazer, 1913 : 95 ~ 96]

そのような考えにもとづいて、人間の身体ではなくその外に置かれる靈魂を「外魂」と呼んでいる。

肉体のimmortalityについては、靈魂のありかから考えて、二つの類型が可能であろう。一つめは身体に靈魂（生命的部分）が複数あるとされる、複数の靈魂型と、二つめは身体の外に靈魂があるとされる外魂型の二つである。

外魂型は複数の靈魂型をかねるが、異なるのは、外魂においては靈魂が身体の外にあると解釈されているのに対し、複数の靈魂型は身体に靈魂が複数存在すると解釈していることである。

1) 複数の靈魂型

まず、複数の靈魂についてである。フレーザーの次のような言述が、複数の靈魂として考えられる。

生命の可分性、あるいは複数の靈魂は、多くの事実によって示されており、未開人だけでなく、プラトンのような哲学者にも受け入れられてきた。……靈魂の統一性と不可分性が本質的なものとして主張されるのは、靈魂についての概念が準科学的仮説から、神学的教義になるときだけである。未開人は教義によって束縛されないので、必要であると考えただけの靈魂を仮定し、自由に生命の事実を説明することができる。[Frazer, 1913 : 221]

そして、フレーザーは複数の靈魂として、ヒダーツァーインディアンとラオスの事例をあげている。

人間は4つの靈魂を持ち、それらが同時にではなく一つずつ体を立ち退くと考え、4つの靈魂が全て立ち退くと、完全に死がやってくると説明する。

[Frazer, 1913 : 222]

ラオスの原住民は、体は30の精霊の座であり、それは手、足、口、目などに住んでいる。[Frazer, 1913 : 222]

フレーザーはこれらを、身体に複数存在する靈魂として解釈しているが、ラオスの例は身体に密接に関わっており、その人物の自己意識や属性との関係は考えられていない。

また、このほかに髪の毛の例を挙げており、それも身体における複数の靈魂と解釈している。フレーザーは、民話において、人間の靈魂あるいは力は、髪の毛と密接な関係があると表され、髪の毛が切られると彼は死ぬか弱くなるということを見た[Frazer, 1913 : 158]と述べている。生命的部分つまり靈魂が複数身体にあり、それが安全である限り、肉体はimmortalであるとしているのである。この髪の毛についても、身体の間わりが密接である。これまでフレーザーの靈魂と解釈してきたものとは、やや異なる性質を持っている。これらの靈魂はその持ち主の個別的人格とは関係がない。それがなくなると徐々に死がやってくる。身体と不可分の臓器のような存在である。靈魂が身体の構成要素とも言うべきものとして考えられており、肉体と密接なかかわりをもつとフレーザーは考えている。フレーザーは初め靈魂を、人間の中にいる小さな人間であり、その在・不在が生死に関わると述べた。しかし、ここでの靈魂は、その一般的な靈魂とは異なる性質をもつ。これらの靈魂は、持ち主の自己意識・属性には関わりがなく、生死にのみ関わる。したがって、単なる生命原理となるものが靈魂として解釈されている。この靈魂とimmortalityの関係を考えると、身体に複数ある靈魂が全てなくなると死が訪れるとされるので、immortalityは肉体に本来備わっている絶対的な性質ではないと考えられる。肉体はimmortalの可能性があるが、靈魂に左右されるという意味で使われているといえる。しかし、逆に言えば、この靈魂は生命原理として肉体に

immortalの可能性を与えるのである。

2) 外魂型

外魂とは、身体の外にある靈魂のことである。フレイザーは、1)の複数の靈魂を發展させて外魂の觀念が生じたとしている。未開人は、もし人間が一つ以上の生命的部分を身体の中に持っているなら、身体の外に生命的部分を持つことができると思うだろう[Frazer, 1913:221]と述べている。さらに、フレイザーは外魂について次のように述べている。

靈魂は死を引き起こすことなく、一時的にそれ自体を身体から不在にすることができる。靈魂が不在でも、安全であれさえすれば、無期限に不在であつてもかまわない。生命(靈魂)は、人間の中に存在する必要はない。靈魂が無傷である限り、その人は元気である。もしそれが傷つけられると、彼は苦しむ。もしそれが破壊されると、彼は死ぬ。言葉を換えれば、彼が病氣もしくは死んだときに、その事實は、彼の生命もしくは靈魂と呼ばれる物質的なものが、それが彼の体の中にあろうと外にあろうと、傷を負ったか破壊されたということによって、説明される。したがって、自分の身体の中に靈魂があるよりも、身体の外どこか別な場所にあつたほうが安全であると考えられるなら、危険が去るまで安全なところに隠しておく。それが永遠であるということもあるかもしれない。この利点は、靈魂が、彼がそれを置いた場所が無傷である限り、その人自身はimmortalであるということである。何も彼の体を殺すことはできない。なぜなら、彼の生命はその中からである。[Frazer, 1913:95]

この外魂における靈魂は、前述の一般的な靈魂と類似している。一つの物質的な靈魂が身体の中に存在しているとされる。それが外に存在するようになるの觀念であると考えている。しかし、この場合の靈魂は、持ち主の生死にのみ関わる生命原理としての靈魂であり、持ち主の自己意識や属性にはかわり

のない靈魂であると解釈されている。例えば、次のような例がある。

インドの物語で、パンチキンという魔法使いがいた。彼は人間の苦しみを感じないが、密林の奥深くにいるオウムにその生命がかかっているという。オウムが苦しむと同様に彼も苦しみ、オウムが殺されると同様に彼も死んでしまった。[Frazer, 1913 : 98]

この例においては、パンチキンの身体の中に靈魂は存在しないが、パンチキンに影響はない。そして、靈魂であると解釈されているのはオウムである。靈魂はパンチキンの生死にのみ関わっており、パンチキンの自己意識や属性には関わりがない。ゆえにこの靈魂は生命原理としてのみ解釈されていることがわかる。

また、次のような例も外魂と解釈されている。

イギリスにおいては、子供は割れたトネリコの木を通り抜ける。それは病気を治すためである。「トーマス・チリングワースは小さい頃トネリコの木を通り抜けて、34歳になる今も元気だ。彼はその木を注意深く保存している。なぜなら、彼の生命はその木の生命に関わっているからである。……」[Frazer, 1913 : 169]

この事例においては、接触の法則²によって子供と木が関係を持つ。フレーザーは、共感的な関係を持つことを、植物に子供の靈魂があると解釈しているのである。ゆえに、この植物の靈魂は、子供の生死に関わるが、子供の自己意識と属性とは無関係である。

複数の靈魂が臓器のような身体の構成要素として存在するのに対し、外魂は

2 物質的対象になしたことは何でも、それがかつて接触していた人間に、等しく影響する[Frazer, 1911a : 52]という法則。

身体との接触はなく、その外に存在すると解釈されている。持ち主の自己意識や属性とのかかわりもなく、その身体における在・不在は生命には影響しない。肉体がimmortalであるためには、どこにあらうとそれが安全でありさえすればよいとされる靈魂である。すなわち、この靈魂は単なる生命原理として解釈されているのである。したがってここにおけるimmortalityも、靈魂次第で肉体にimmortalの可能性もあるとされるという意味で用いられている。

1)、2)において、靈魂として解釈されているものは非常に異なる性質を持っているが、共通する部分もある。まず、肉体のimmortalityに関わる靈魂は、持ち主の自己意識や属性にかかわりのない、単なる生命原理であるということである。複数の靈魂においては、身体に複数ある靈魂であるので、一つ一つが独立している。それぞれは身体の各所に宿っているが、それが全てなくなることが死とされる。すなわち、靈魂は持ち主の生死にのみ関わり、自己意識や属性は、それら靈魂には課せられていないということになる。1においてフレーザーの靈魂解釈を分析したが、これらはその「B 持ち主個別的人格に関わりのない靈魂」に当たる。靈魂のimmortalityは、持ち主の自己意識や属性の媒体が靈魂と解釈され、それが肉体の死後も存続することと考えられていた。そしてそのimmortalityは絶対的なものと解釈されていたのに対して、肉体のimmortalityについては、靈魂次第であり、「immortalである可能性」と考えられている。しかし、Bは、肉体にimmortalityを与える靈魂とも言えるのである。

さらに、靈魂は、複数の靈魂として身体の「生命的部分」とも述べられており、極めて肉体との結びつきが強いと考えられる。身体 of 各所に宿ることから、臓器のような身体 of 構成要素で、それがなくなることが死とされていた。したがって、靈魂と肉体とを分けて考えているが、その一方で肉体と密接な関わりを持つものも靈魂として解釈されている。

3 『金枝篇』におけるimmortalityのまとめ

ここまで、フレーザーの金枝篇におけるimmortalityの概念について検討し

てきた。フレーザーがimmortalを用いるときには靈魂に対して用いる場合と、肉体に対して用いる場合とがあった。

靈魂に対して用いた場合は、肉体はmortalであり消滅するけれども、靈魂はimmortalであるとされる。この場合の靈魂は、持ち主の個別的人格に関わる。自己意識そのもの、自己意識の媒体、そして属性の媒体として考えられるものが靈魂として解釈されている。属性は神的な力・特殊な力など超自然的属性と、地位、身分、肩書き、資格、名前や身体的特徴、あるいはその人の記憶となるものなどの現世的属性のことである。それら自己意識・属性は、肉体が消滅しても何らかの形で残るとされる。その存続の仕方は、肉体との関係において4類型に分けられる。一つめは異なる肉体、二つめは同一の肉体である。三つめは同一の肉体であるが物質的な肉体ではない。靈的な肉体に入って靈魂が存続する。そして最後は肉体がなくとも靈魂は存続するとのことであった。そのように靈魂は存続し続け、生者に影響を及ぼすとされている。例えば、神的な力は世界の繁栄と結びついているので、靈魂が存続することで世界の安定が保たれたり、靈魂が他の人物に伝達されることで、属性（地位、身分、肩書き、資格、名前や身体的特徴など）が伝達されたり、またそのような属性や自己意識が生者の中で記憶として残り、崇拜に結びついたりなどである。そのように持ち主の自己意識と属性を伝達するものを靈魂と解釈し、それらが肉体の死後も存続し続け、生者に影響を持つことがimmortalityであるとしているのである。

一方、immortalが肉体に対して用いられる場合、靈魂が安全である限りにおいて、肉体が死なないということがimmortalityとされる。靈魂に対して用いられるimmortalityは、靈魂がimmortalであることが必然性をもって語られるのに対し、肉体に用いられるimmortalityは靈魂次第であり、immortalの可能性があるという程度である。さらに、肉体にimmortalityが用いられる場合、靈魂は単なる生命原理として解釈される。持ち主の生死には関わるが、自己意識・属性には関わらない。そしてこのとき、肉体との関係が非常に密接になっているのが見出される。肉体の各所に宿り、それらが全てなくなることが死とされる。靈魂は、臓器のような身体の構成要素のようなものとして解釈されて

いる。フレイザーは靈魂について、「身体に複数の生命的部分をもつ」[Frazer, 1913: 221]や、人間の靈魂あるいは力は、髪の毛と密接な関係を持つ[Frazer, 1913: 158] (傍点筆者) と述べている。したがって、肉体に関してimmortalが用いられている場合も、靈魂が存在しているということが前提とされているのである。

靈魂に関わるimmortalityと肉体に関わるimmortalityにおいて、靈魂の肉体との関わり及び生死への関わりは異なるが、生命原理として存在するものは同様に靈魂と解釈されている。そしてimmortalityは靈魂と肉体との両方に用いられているが、前者に関しては必然性、後者に関しては可能性として語られる。そしてどちらにおいても靈魂が重要性をもつ。

しかし、靈魂に関するimmortalityで見たように、靈魂は単に生命原理としてだけでなく、自己意識やその媒体としての靈魂、あるいは属性の媒体など、個別的人格として解釈されている。この場合、靈魂として解釈されていない性質は肉体に帰されることになる。例えば、靈魂が生命原理として解釈されている外魂の例³を見ると、靈魂が身体になくとも、その身体で話し、行動する。そのとき、その者の人格はどこに帰されるのか、靈魂でなければ肉体に帰されるのかという問題が生じる。1においてフレイザーの靈魂の解釈を分類したが、その分類は平面上の分類とはとらえられないように思われる。特にAとBは次元を異にして用いられているように感じられ、この二つの靈魂が同時に存在することもありうるとも考えられる。フレイザーにおける靈魂および肉体、それぞれについての観念と両者の関係については、さらなる調査が必要とされよう。

<キーワード>

J・G・フレイザー 金枝篇 靈魂 immortality

3 巨人の話 [Frazer, 1913: 98] など。

【参考文献】

Frazer, James George, 1980 (=1911 a) , *The Golden Bough : A Study in Magic and Religion*, Part I , London : The Macmillan Press LDT

———, 1980 (=1911 b) , *The Golden Bough : A Study in Magic and Religion*, Part II , London : The Macmillan Press LDT

———, 1980 (=1911 c) , *The Golden Bough : A Study in Magic and Religion*, Part III , London : The Macmillan Press LDT

———, 1980 (=1906 a) , *The Golden Bough : A Study in Magic and Religion*, Part IV vol. i , London : The Macmillan Press LDT

———, 1980 (=1906 b) , *The Golden Bough : A Study in Magic and Religion*, Part IV vol. ii , London : The Macmillan Press LDT

———, 1980 (=1913) , *The Golden Bough : A Study in Magic and Religion*, Part VII , London : The Macmillan Press LDT

J. G. Frazer's Concept of Immortality

Risa AIZAWA

This paper intends to explain the concept of *immortality* as it appears in J. G. Frazer's *The Golden Bough*. This concept, which is deeply related to the main topic of this book, can be better understood in relation to the idea of *soul*. Frazer interprets soul as a "manikin", a vital principle which reveals itself in different forms. According to Frazer, *soul* is understood basically in four ways: (1) as the soul's owner's self-consciousness itself, (2) as a vehicle which transmits this consciousness, (3) as a vehicle for its owner's attributes, (4) and as the vital principle itself.

Within the concept of *immortality*, we can also find the ideas of immortality of the *soul* and immortality of the *body*. The former can be divided among four categories, and the latter among two, this division being based on the different ways body and soul relate to each other. Within the four categories found among the concept of immortality of the soul, this latter is interpreted as a vehicle for its owner's self-consciousness or as a vehicle through which its owner's attributes reveal itself. In short, immortality of the soul means survival of its owner's personality. Within the two categories among which we can divide the concept of immortality of the body, *soul* can be interpreted either as vital places of the body, or as a vital principle existent outside the body.

Frazer interpret as soul everything which exist as vital principle, therefore *soul* is playing the leading role in both immortality of soul and body. We can find, however, soul is understood not only vital principle, but in many ways.

The concepts of *soul* and *body*, as well as the relation between them still calls for further research.